ネイル

日向梨久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネイル

【Ｎコード】
Ｎ６３０８Ｂ

【作者名】
日向梨久

【あらすじ】
ネイルは私を美しくしてくれる。ネイルは私を幸せにしてくれる。
現在更新停滞中です。申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

1

私は、うっとりと自分の手を眺めた。
ピンクベースのネイルに白い花が咲き、適当な箇所に小さなシルバーストーンが散りばめられている。両手の親指のネイルには5つの花弁の中央に、少し大きめのピンクストーンを付けてある。

週に1度、ネイルサロンに通うのが最近の私の日課になっている。ハマった切っ掛けは同僚からの誘いであったが、今では一人で通う様になった。
化粧映えのしない、のっぺりとした顔の私は、お世辞にも綺麗とは言い難い。しかし、こうやってネイルを綺麗に飾る事で、同僚から、男性から、『綺麗だね』と言って貰えるのだ。
私にはそれが堪らなく嬉しかった。

今週も、勿論ネイルサロンへと足を運んだ。運ぶ筈だった。

「こんな所にネイルサロンなんてあったかしら」

いつものネイルサロンへ行く途中、道端に目を惹く看板が現れた。いや、現れたという表現は正しくないかも知れない。だが私には、目に飛び込んで来たソレが正しく『現れた』と表現を用いるのにぴったりなくらい、突然だったのだ。

『貴女の夢を叶えるネイルを提供します。貴女の望みは何ですか？』

夢を叶える？
女性客を釣る謳い文句かしら。
私は一瞬躊躇したが、その看板が指し示す方向へと歩いて行った。

ビルとビルの間の狭い隙間を通り、更に奥へと入る。
予想外に閑散としていて、私はそれ以上進むのを躊躇した。
本当にネイルサロンなんてあるのだろうか。
そう不安になった時だった。

『夢を叶えるネイル屋』

小綺麗な看板が目に入ってきた。

「夢を叶えるネイル屋…」

ネイル屋とは何だろう。ネイルサロンではないのだろうか。
店内に入るのを躊躇い、ふと、店の外のディスプレイに目をやった。きらびやかなネイルチップが並んでいる。
白地に鮮やかな赤で花を咲かせているチップ。ブルーベースで人魚を思わせる様な繊細なモチーフが描かれたチップ。かと思えば黒地に金色の蛇が絡み合う様に描かれたチップと、バリエーション豊かな世界がそこには広がっていた。

「いらっしゃいませ」

驚いてビクンと身体を震わせる。いつの間にか店内から一人の青年が此方に笑顔を向けていた。まだ若そうだ。２０代半ばといった所だろうか。

「あの…」

「どの様なネイルをお探しですか？」

青年はまたにっこりと笑いながら、和やかな口調で問い掛けた。

「き、綺麗になりたいの。夢を叶えてくれるって本当？だったら私、綺麗になりたいの。誰よりも、誰よりも！」

言ってから私はハッとした。一体何を口走っているのだろう。

まるで今まで圧し殺してきた願望が、一気に口について出た感じだった。

大体、願いを叶えるだなんて、それはネイルを綺麗に着飾ってくれるだけの事だろう。

「畏まりました。では、此方へ」

青年は終始笑顔のまま、戸惑う私を店内へと導いた。

店内は明るかった。全体的に白を基調として、優しい色合いの橙色の照明が使われている。

ざっと店内を見渡してみると、客は私だけの様だ。それに店員も彼だけの様だった。

「お掛けください。なにぶん、辺鄙な所にあります故、お客様など久しぶりですよ。

申し遅れました、私、店長の騎斉風人と申します。宜しくお願い致します」

そう言って青年は暖かい緑茶を差し出した。

キサイフヒト。不思議な響きを含むその名前を私は頭の中で反芻し、出された緑茶に口を付ける。緑茶以外の香りが仄かに漂い、私の鼻孔を擽った。

「失礼ですが、此方に必要事項をご記入願いますでしょうか。個人

情報は私が責任を持って管理致します」

差し出された用紙の記入事項はごく簡単な物だった。
まずは、氏名、年齢、職業。それから夢に願望に好きな色、好きな動物、好きなデザイン。
後半はほぼアンケートの様な物だった。

「中島美知子さま、２８歳、ＯＬですか。いや、もっとお若いかと思ってました」

またもや青年はにっこりと微笑みを投げて寄越す。
その笑みに、私は思わず顔が火照るのを感じた。赤くはなっていないだろうかと慌てて頬に手をやる。少し熱くなっていた。

「さて」

青年は今度は真面目な顔を投げて寄越した。

「綺麗になりたいのでしたよね。貴女の望みは。夢にも願望の欄にも書かれてらっしゃる。具体的にはどの様に？」

「ネイルだけなんです」

私は言った。胸がぎゅっと切なくなる。

「綺麗にネイルを着飾って、そうしたら、私は一時的にでも綺麗になれるの。見た人達の視線は勿論この指先に注がれているのだけれど、でも、それでも私は…」

私は、綺麗だと言われたい。

「畏まりました」

青年は静かに頷いた。

青年に促されるままに別室へ移動し、手を青年に預ける。先ずは残っていたネイルを拭き取る作業から入り、次には掌、手の甲を丹念にマッサージして行く。

それが何とも心地よくて、私は何度も意識を失いかけた。緑茶を飲んだ時と同じ香りが程よく私の神経を刺激する。まるで頭の中までマッサージされている気分だった。

「終わりましたよ」

「え」

自分が今何処に居るのか解らなかった。辺りを見回し、目の前にいる青年と目があった事で、漸く自分が居る場所を思い出した。

「え、あ…」

私は自分の指を見つめた。

2

私の気分は晴々としていた。あのネイル屋へ行った翌日から、私は社内のアイドル的存在になった。

声を掛けてくる男性は増し、『綺麗だね』と言ってくれる。ネイルを見て、ではない。私の目を見て、だ。

青年が施してくれたネイルは、私の好きな色であるピンクが使われていた。クロスのモチーフが描かれ、嫌味のない程度にラメとストーンが散りばめられている。

私の好みぴったりのネイルだ。

仄かに香るのは、ネイル屋で漂っていた匂い。微かに甘くて嫌味の無い、心を落ち着かせてくれる香り。

今までのネイルサロンとは明らかに違った。何故あの様な素晴らしい店が、閑散としているのだろうと疑問に思う。

「美知子、最近綺麗になったわね。何かあった？」

ぽんと私の肩に手を置いて話し掛けて来たのは、私にネイルサロンを紹介してくれた横山里沙だった。彼女はいつも華やかで、同じ制服であるにも関わらず、その存在感は別格だった。

「そぉ？」

だからこそ、彼女に『綺麗』と言われた事が堪らなく嬉しかった。心が弾むというのは、こういう事を言うのか。

私は満面の笑みを彼女に返した。彼女も私に微笑み返す。

「うん。あ、そのネイルも綺麗！いつもの所の新しいデザイン？」

そう言って、彼女は私の指先をじっくりと眺めた。彼女の指にも綺麗なネイルが輝いている。白地に、鮮やかな蝶々が舞っていた。

違う、と言いかけて、私は躊躇した。

彼女は普段から綺麗だ。綺麗な上に、綺麗なネイルをしている。あのネイルサロン、いや、ネイル屋を教えたら、彼女は益々綺麗になってしまう。

些細な邪心が私の中で生まれた。彼女に教えたくない。綺麗になるのは私だけで良い。

「う、うん。そうなの」

多少の罪悪感を覚えつつも、私は嘘を吐く事にした。大した嘘ではない。これくらいなら許されるだろう。

彼女は何の疑問も抱く事もなく、あっさりと信用してくれた。

夜はディナーに誘われた。私にとっては初めての経験だ。同性と食事に行く事はあっても、異性と行く事なんて全くない。しかも、あの識井達也に誘われるなんて。

識井達也は、営業一課の稼ぎ頭だ。甘いマスクと饒舌な口述で、いくつも契約を取って来ている。

そんな彼は勿論、モテる。社内は勿論、社外の女性からも声をかけられる程だ。密かにファンクラブまであったりするらしい。

おまけに独身とあれば、女性達は必死だ。バレンタインの時等は戦争となる。

私もバレンタインチョコをあげた事があった。だがそれは、他のチョコにまみれて、きっと彼の口には入らなかった事だろう。

「でね、うちの部長が…。…あれ、中島さん？あ、ごめん、僕ばかり喋っちゃって。つまらなかったよね」

「えっ、い、いえ、そんな、こ、ことない、ですッ」

思わず声が上擦る。緊張の所為で、思考があっちこっち飛んでいたらしい。今の識井さんの話は全く耳に入っていなかった。

「ご、ごめん、なさい」

言葉を覚えたての赤子の様に、言葉を区切って喋る。緊張で、上手く舌が回らないのだ。

「美知子さん。あ、美知子さんって呼んでも良いかな」

その言葉に、私はこくこくと頷いた。恐らく顔は真っ赤になっていた事だろう。

憧れの人物が、私に微笑みかけている。それに『美知子さん』だなんて。今まで男性に一度として呼ばれた事の無い呼び方に、私は興奮した。

「そんなに緊張しないで。僕はもっと美知子さんの事が知りたいんだ。美知子さんも僕の事を知って貰いたい。

迷惑でなければ僕の事も達也と呼んで欲しいな」

嬉しい！素直にそう思える。まるで口説き文句の様だ。

頬に手を当てると、顔が火照っているのが解った。

識井さんも照れているのだろうか。落ち着き無い仕草で顔を背けて鼻の頭を指先でなぞる。それが愛しくて、つい笑みを漏らしてしまった。

「それ！」

「え？」

「美知子さんは笑っていた方が、絶対良いよ」

帰りは識井さんがマンションまで送ってくれた。最後に『楽しかったよ。また今度、食事に付き合ってね、美知子さん』という言葉を残して去って行った彼の背中を、私はいつまでも見つめていた。

嗚呼、こんな事ってあるだろうか。まるで夢の様だ。いや、夢の世界に居る様だ。

夢見心地のまま部屋へ戻り、自分の顔を鏡に映してみる。特別変わった所は見受けられない。だが、綺麗になったと言われれば、確かに綺麗になったのかも知れない。　角度を変え、ポーズを変え、私は自身の姿を映した。

「あっ、やだっ！」

頬に手を当てたポーズを取った時、ほんの少し欠けたネイル目に入った。早速明日ネイル屋に行って、新しいネイルにして貰おう。今度は何が良いかしら。

私は夢見心地のまま、明日のネイルを夢見て、本当に夢の中へと

誘われて行った。

3

「効果はありましたか？」

青年は私の指を優しく撫でながら、訊ねた。

昨日の予定通り私はネイル屋に来ていた。ネイル屋の青年―キサイフヒト―は別段驚く事無く私を招き入れてくれた。

「ええ、とっても。素晴らしいわ。皆私を綺麗だと言ってくれたの」

うきうきと話す私に、青年は満足そうな顔を見せた。

「それでは今日は、どの様な感じに致しましょうか」

「笑顔の似合う女性になりたいわ。綺麗だけじゃなくて。笑顔が素敵な女性に」

「畏まりました。他に何かご希望は御座いますか？デザイン等の」

そう訊ねられて思い出した。横山里沙が蝶々のデザインのネイルをしていた事を。

「蝶々。蝶々を描いて欲しいわ。うんと可愛く」

「畏まりました」

青年は微笑んで、作業を開始した。段々と意識が遠退いて行くのは、気持ちが良い所為だろうか。

甘い独特の香りに包まれて、まるで空の中をふわふわと浮いてい

るかの様だ。

私は識井達也を想った。このまま行けば、もしかしたら彼と付き合う事が出来るかも知れない。それどころか、結婚も夢じゃないかも知れない。

一緒独身で居ると思っていた。男性とまともに付き合った事もなかった私は、きっとずっとこのままだろう、と。

諦めていたのだ。

だが。微かな希望が見えて来た気がする。

私は嬉しくなった。自然と笑みが溢れる。ネイルひとつで、私は『綺麗』を手に入れた。そして『素敵な笑顔』を手に入れる。

次は何にしよう。

誰にも負けないくらいの身体にしようか。

幼い頃には沢山の夢を描いた。ピアニストだったり、保母さんだったり、お花屋さんだったり、ケーキ屋さんだったり。やりたい事が有りすぎで、そのどれもが実現出来ると信じて疑わなかった。

けれど、成長するにつれて、その夢は薄れていった。代わりに沸いてきたのは綺麗になりたいという願望。しかし、それも叶わなかった。所詮、生まれ持った才能や容姿には敵わないのだ。

私は、それを悟ったのだ。悟った筈だったのだ。

「はい、終わりましたよ」

青年が静かに言った。微笑みながら。

両手の指先には可憐な蝶々が舞っていた。横山里沙にも負けないくらい、綺麗で可愛らしい蝶々。

私は笑った。にっこりと。最高に素敵な笑みで。

甘い香りが鼻孔を擽り、脳天まで浸透する。それが少しこそばゆ

く、私はまた笑った。

会社で優越感に浸る事が出来るなんて。今までなら『お茶』と無愛想に言うだけでこちらを見向きもしなかった課長が、『中島君、お茶淹れてくれるかな』等と私の目を見て言うようになった。私は内心毒づきながらも、勿論満面の笑みでその申し出を受ける。

どうぞ、と差し出すと、『ありがとう』と言う言葉が返って来て、私は驚愕した。普段ならそんな事は絶対に言わない頑固で昔ながらの男尊女卑者。『女は黙って男に従ってろ』が口癖で、お礼なんて言われた事などなかったのに。

これもネイルのお陰？なんて思っていると、課長がにやりとイヤらしい目付きを此方に向けた。ゾクリと嫌悪感が背中を走る。

「中島君」

「はい」

「今夜空いているかね？打ち合わせをしたいんだが」

一体何の打ち合わせだと言うのだろうか。私の仕事は殆んど社内での事務仕事。打ち合わせが必要になる仕事などではないのだ。しかも今夜？彼は今夜と言わなかっただろうか？

「……は？」

意味が解りかねず、何とも間の抜けた声を出してしまった。

「ま、今夜空けておいてくれたまえ」

「はぁ……」

私は生返事を返すしかなかった。食事を一緒にと言う事だろうか。仕事の話をしながら？

多少、疑問が頭をもたげつつも、仕事では致し方無い。

「やったじゃない、美知子」

「えっ？」

「あの課長、３０代でまだ独身よ。それなりに貯金もあるらしいし、親の遺産も相当なものみたい。もしかしたら玉の輿？うわぁ、良いなぁ」

里沙は大袈裟とも思える憧れの視線を投げて寄越した。

「結婚式には呼んでね」

何とも気が早い。私は呆れつつも曖昧に笑顔で誤魔化した。

第一、私には達也さんが居る。まだ一回しかデートした事はないけれど、彼は確実に私に興味を持ってくれている。課長と達也さんを天秤にかけるとすれば、勿論断然達也さんを取る。

当たり前じゃないか、と私は目の前の自分に微笑みかけた。

洗面所には今、誰も居ない。私は丹念に自分の顔を鏡に映して、角度を変えながら何度も確認した。

少し痩せたかしら。

ふふ。笑顔も素敵。完璧ね。

私は一通り自分の顔を確認すると、トイレの個室へと入った。

そうだ、課長の事を達也さんに相談してみよう。どんな反応を示してくれるだろうか。行くなと止めてくれるだろうか。

私はクスリと笑った。

今までに体験した事のない様な高揚感がそこにはあった。二人の男が私を求め、奪い合う。考えただけでもぞくぞくっと私の背中を擽った。

4

「最近、調子に乗り過ぎよね」

ハッと、トイレの扉を開く手を止めた。聞き慣れたその声の主を、頭の中で探る。

「美知子さーぁ、私が教えたネイルサロンに行ってないのよ？信じられる？私に嘘ついたのよ？」

怒りが込められたその声は、紛れもなく横山里沙のものだ。何て事だ、嘘がバレてしまったのだ。

私は速くなる鼓動を抑えながら、どうすべきかと思案した。今すぐ出て行って謝るべきか、それとも知らぬ顔で通すべきか。

「森山課長にも色目使ってるんでしょ？」

里沙と一緒に入ってきたのであろう女性声が聞こえた。営業の津嶋ゆかりだ。

ドクンと胸が苦しくなった。

「そうよぉ」

色目を使った？私が？

謂れの無い誤解だ。そんな風に映っていたなんて。そんな風に思われていたなんて。ちっとも知らなかった。

「識井くんにも色目使ってるのよね、あの子」

「識井さんにまで？！」

里沙の驚愕と怒濤が入り交じった声がトイレの中に響いた。

私の額から、脂汗の様な、気分の悪い汗が流れた。相変わらず胸はドクンドクンと鼓動を繰り返している。その音がトイレの中に反響しそうで、私は思わず自分の胸をぎゅっと掴んだ。

「信じらんない……」

「そう言えば里沙、識井くんの事狙ってたっけ？」

あははと笑う津嶋ゆかりの無神経な声が、無情に私の頭の中に流れ込んでくる。

「あげちゃえばぁ、識井くん」

ガンッ

ケラケラと笑うゆかりの声がぴたりと止まった。里沙が何かを叩いたらしい。その振動がビリビリと私の居る個室まで伝わって来た。気のせいかも知れなかったが、しかし里沙の怒りは確実に私の胸を貫いた。

今出て行っては駄目だ。

ドクンドクンと口から心臓が飛び出そうなくらい高鳴っている。里沙が識井さんの事を好きだったなんて。ファンクラブに入っている事は何となく解っていたが、そこまで想っていたなんて。

膝がガクガクと揺れる。辛うじて立っている状態だ。ここで倒れては音が立つ。絶対に気付かれてはならない。

私は二人の足音が完全に聞こえなくなるまでその場に立ち尽くし、ずるずるとその場に座り込んでしまった。

席に戻るのは躊躇われた。隣の席には里沙がいる。先程の様子から見て、何をされるか解ったものではない。
だが、まだ今日の業務は終わってはいなかった。私は何度も深呼吸を繰り返すと、意を決して自分の席へと戻った。

「あ、美知子」

ビクンと身体が硬直する。席に着いた途端、里沙に話かけられたのだ。何を言われるのだろうか。深呼吸で折角宥めた心臓が、また暴れだした。

「何処に行ってたの？もしかして体調悪い？大丈夫？」

いつもと同じ態度の里沙。いや、いつも以上に優しいかも知れない。大袈裟に心配している様は、見ていて気持ちが良い物ではない。

「だ、大丈夫……。ちょっと、更衣室に行ってただけ」

私は冷静に、普段通り喋る様に努めた。動揺を相手に悟られては駄目だ、そう思ったからだ。

私は夢でも見たのではないだろうか。そう思わせる程、里沙の態度からは先程の怒りは微塵も感じられない。これが演技だとしたら、彼女は女優にでもなれるだろう。

今日ほど、時間の経過が遅く感じた事はない。一分一秒が倍、いや、それ以上に長く感じられた。隣でカタカタとパソコンのキーボードを叩く指には可愛らしい花が咲いていた。

「じゃ、今日は頑張ってね」

終業と同時に里沙が私の肩に軽く手を乗せ、おどけてウインクして見せる。私は何も答える事が出来ず、曖昧に頷くしかなかった。

里沙は、どういうつもりなのだろうか。達也さんとの事を問いただす訳でもなく、私を罵倒するでもなく、笑顔でいつも通りに接してくる。

達也さんの事は諦めた？

いや、それは無い、と心の中で否定する。トイレでのあの様子だと、とてもそうは思えない。だとしたら、何かを企てているのだろうか。

私はぶるりと身体を震わせた。あの笑顔の裏に隠された心を思うと、どす黒い霧のイメージしか浮かばない。

「お口に合わなかったかね？」

その言葉でハッと我に返った。いけない、課長と食事中だったのだ。

「いえ、そんな事はありません。とっても美味しいです」

にっこりと微笑んで、私は答える。正直、料理の味なんてちっとも頭に入っていなかった。里沙の言動が気になって仕方がない。

しかし、そんな私の気持ちを知るよしもなく、課長は満足げに頷いてみせた。勿論、仕事の話など一切していない。

私は課長に気付かれない様に溜め息を吐いた。お酒はあまり飲めない方なのに、やたらと勧められる。仕方無く飲んでいたら、やはり酔いが回って来てしまったらしい。視界がぼんやりと霞み、焦点が定まらない。

「あの、私、これで、失礼、しま、す」

何とか理性を保ちつつ、たどたどしい口調で暇を告げる。が、課長は私の手を掴み、握った。

「送って行くよ、随分酔っ払っているみたいだし」

正直、ちゃんと家に辿り着けるか不安だった。だが、課長の態度を見ていると、送って貰うのも何となく危険な様な気がした。

躊躇していた私を、課長は強引にタクシーへ乗せると、行き先を告げた。私には既に課長の言葉を理解する事が出来なかった。

世界がぐるぐる回り、身体がふわふわと浮いている様な感覚。それはあのネイル屋を思い起こさせた。

暫く走っていたタクシーは止まり、目的地に着いたらしい。果たして、私は自宅を課長に伝えておいただろうか。

疑問は酔いが回っている私の脳を、少しだけ覚ましてくれた。そして、自分の居る場所を理解した。

きらびやかな紫やピンクの品の無い照明に浮かび上がったのは、『ホテル』の文字。

「……！ちょ、私、困ります！」

強引に手を引く課長。此処まで来て何を言っているんだ、と呆れ顔だ。冗談じゃない。私はそんな事の為に来たんじゃない。そんなつもりこれっぽっちもない。

私は激しく抵抗し、課長の手から逃れると、方向も解らぬまま駆け出した。一刻も早く、この場所から逃れたかった。部屋まで入らなかったのが唯一の救いだ。縺れる足で、それでも何とか人通りが

ある大通りまで出る事が出来た。
途端に込み上げる吐き気に、抑える事が出来ずに私は嘔吐した。
それと同時に涙が溢れ出る。
何故。
私の思慮が足りなかった所為だろうか。まさか、こんな事になる
なんて思ってもみなかった。
綺麗になれた事で受かれて、笑顔を振り撒いて。

「う……ぁ……」

嗚咽は止まらなかった。悔しさと、情けなさ。私は泣き続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6308b/

ネイル

2010年10月21日20時29分発行